

1970～80年代
 戦争の時代に青春を生きた
 二人の年長詩人と、
 一人の若い画家が、出会った。
 画家のアトリエ「風騷居」に残された
 魂の交流の下キユメント

ほめうた
 三好豊 齋藤隆 書に
 きりんビールの祥纏を羽織って
 芋の茶をかむ二た男が
 稲田の間からあらはれる
 この寒村の駝のゆふぐれ
 頬や指の比助肉とつまんでひいて
 ベンガルの髯兎の
 地獄の飢え
 古代の假面の相に見出す
 この男に幸あれ
 笙や羯鼓と空に鳴らせば
 おらんとははあも酔って浮かれて
 この村里の猩猩舞
 板頭へ胡飲酒や胡徳樂
 傾いた三階の園の廣間へと
 羅陵王を呼び招く
 この男に幸あれ
 百面相の羅漢たら
 蝦蟇仙人と鐵拐老
 風は吹かれてゆらゆらあちく
 なにがいたい この世に西女のか
 人間の業の深さは悲心悟だが
 またもって滑稽さはまる
 願人坊主のかなしみる
 奈落の破天ひに描きたり
 この男に幸あれ
 exegesis.comとは假面の比喩だ
 此喩から批評の牙が抜けたら
 傍聴もこねくらばありだらう
 そこではくは志告する
 セトモノな人さる撫てまほすふと
 ありやきみ 幻想ですよ
 會津金池のさるですよ
 やさしくみたら残心な牡虎猫の爪もさつ
 この男に幸あれ
 ピーと張った午前定ま時の
 寒月の面をかすめて
 阿賀川の長い橋と
 ニ輪車に尻も浮かして
 仰様纏の男が犯人でゆく
 庚申八月 三好豊 齋藤隆 書

関連イベント

オープニングライブ
 松田惺山(尺八奏者・鬼太鼓座座長)
 10/30(火)18:30~19:30
 1,000円/申込み不要(直接会場へ)

ギャラリートークと詩の朗読
 齋藤隆(画家)・寺原信夫(詩人)・池井昌樹(詩人)
 11/23(金・祝)15:00~17:00
 1,000円/申込み不要(直接会場へ)

人形浄瑠璃 猿八座公演「源氏烏帽子折」
 11/25(日) ①13:30~15:00 ②16:00~17:30
 (各回とも公演内容は同じ)
 会場:砂丘館一階和室/定員:各回30名
 一般2,000円、中高生1,000円、小学生以下無料(保護者同伴にて幼児入場可)
 *要申込み/申込み開始10月23日

お申込みは砂丘館へ

tel.&fax.025-222-2676/E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp
 ※fax、E-mailでお申込みの方は連絡先(電話番号)、人数を併記してください。



砂丘館

新日本銀行新潟支店長代理

新潟市中央区西大畑町5218-1
 tel.&fax. 025-222-2676
 sakyukan@bz03.plala.or.jp
 http://www.sakyukan.jp/

指定管理者
 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体
 新潟駅万代口より浜浦町線C2系統または
 観光循環バス乗車「西大畑坂上」下車徒歩1分
 ※砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の
 道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。
 ※新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券
 提示にて1時間分の無料券を差し上げます。



右:三好豊一郎「鶴頭花」墨・水彩、紙 74.5×30.7cm
 左:会田綱雄 書(幻花空身即法身) 136.2×30.0cm



上:三好豊一郎「ほめうた」1980年 書 172.0×44.0cm
 右:齋藤隆「ビュー」1980年 コンテ、紙 180.0×135.4cm
 下:会田綱雄「佐渡」油彩・水彩、紙 7.5×9.8cm



2018
 10 | 30
 [火]

12 | 09
 [日]
 9:00-21:00
 ※月曜、11/6、11/27 休館

観覧無料

主催

砂丘館

新日本銀行新潟支店長代理

私たちは砂丘館の自主事業を応援しています。

帝國あられ株式会社

NSGグループ

株式会社ナレッジライフ

ISHIKAWA

新日本ビルサービス

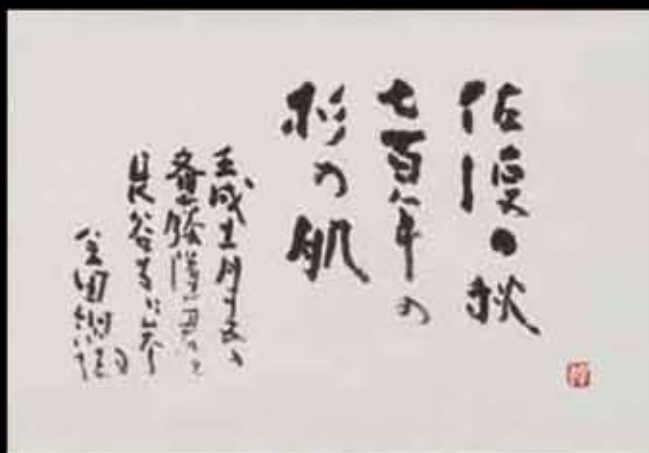
丸屋本店

藤田金属

郷土の文化に親しむ会



板額「風騷居」三好豊一郎 書



会田綱雄 書(佐渡の秋) 1983年
24.0×35.0cm



齋藤隆「鶯の宮(冬)」1968年
鉛筆、紙 54.0×37.6cm



齋藤隆「オブジェⅡ(下図)」2008年
鉛筆、紙 75.5×54.0cm

風の 坩堝 から

福島県須賀川市に住む画家、齋藤隆は、砂丘館や新潟絵屋で幾度も紹介してきた新潟の画家、栗田宏と交流があり、栗田の展示で幾度もお会いする機会があった。最初はその栗田夫妻を通じ、ついで齋藤本人から、彼のもとにある二人の詩人、会田綱雄と三好豊一郎の絵や書を砂丘館で展示してほしいとの申し出を昨年いただいた。

1989年といえば、もう30年近く前になる。

その年の春、新潟市美術館で開かれた詩人、西脇順三郎の絵と詩を紹介した展覧会で、担当学芸員だった私は、この高名な詩人と親交のあった詩人十数人にオマージュ(献詩)を依頼して書いてもらった。その十数人のうちに、会田綱雄と三好豊一郎のお二人がいた。会田さんは電話でのお話だけだったが、三好さんは、八王子のご自宅を数度お訪ねしたのは、展覧会のためにわざわざ幾幅かの絵を描いてくださったので、それをお借りにあがったのだったと思う。端正に正座され、物静かに、けれど少しばかり甲高い声で、ぼつりぼつりと話される姿を、今も昨日のこのように思い出す。お二人が亡くなるほんの数年前のことだった。

三好豊一郎は1972年、若き日の齋藤隆の個展に最初の文章を寄せて以来、この画家に注目・矚目しつづけた。懇切鋭利な批評文を幾度も書いた。福島、糸魚川、佐渡、男鹿、そしてまた福島へと東北を転々とする流浪者のごとき生活を続けながら絵に没頭しつづけた修行僧に似た画家を、しばしば訪問し、激励し、交流した。齋藤に三好が送った書簡数百通は、現在北上市の文学館に貴重な資料として所蔵されている。

会田綱雄が初めて齋藤に会ったのは1980年の春。山形で会田、三好、大岡信が招かれた講演会に当時佐渡に住んでいた齋藤が訪れて、三好に紹介されたのだという。

出会った年の暮れに出た「詩と試論 無限 43」(会田綱雄特集号)では、齋藤隆の9点の絵の図版に、会田が書き下ろしの詩を寄せた「鬼の座」と題された8ページが冒頭に置かれ、さらに「出会ー会田綱雄と齋藤隆」と題された三好の一文が付された。そこにはこう記されている。

会田綱雄は芸術上の繊細な神経を茫洋とした風貌につつま、齋藤隆は鋭敏な感受性を素朴で率直な態度のなかに持っている。ともに東京生まれだが、一人は無頼と自称する村夫子、一人は放浪の野人、齋藤隆も常日頃はモンペに下駄でどこへでも出向く男だ。二三日顔を合わせただけで、それほど立入った話には及ばなかったが、おのずから人間的にも共鳴するものがあったはずだ。齋藤君は遠慮がちであったが、会田綱雄は親しげに「タカシさん」と呼びかけていた。

会田はこの「鬼の座」について、齋藤の画集の絵を「手元において四六時中ながめているあいだに、ほとんど自然に思い浮かんできたせりふを詩の形に整え」たと書いている。その後、齋藤の佐渡や男鹿や福島の家を会田は幾度も訪れ、その都度長逗留していったという。会田の書や絵はそういう折に齋藤の手元に残されたものだった。

砂丘館での展示は、結局、二人の詩人とひとりの画家の、精神の交流を伝えるドキュメントなのだろうと思に至るようになり、詩人の書と絵に加えて、齋藤の絵も合わせて展示することにした。

世代は微妙に、大きく違いつつも、長い年月を通じて気脈を通じ合った3人を結びつけたものはなんだったのだろうと思う。

それは、「死」、ではなかっただろうか。

それぞれの詩にも絵にも、本格的には、まだ接しはじめたばかりの私が、そう書く不遜を重々承知しつつも、直感的に、そう感じるのだ。1940年代に「空虚な死以外の何ものでもない」戦争から三好を解放したのは肺結核という「死に至る病」だった(戦後、彼はそこから生還し、詩人となった)。会田は同じ戦時中を中国で特務機関員として過ごした。同じ境遇に身を投じた洲之内徹は、私が強い影響を受けたもの書きだが、彼が戦後発表した小説群に刻まれた死の影を、私は重く受けとめたことがあった。会田綱雄の名を私に最初に教えたのも、会田の書「鬼よさらば」をめぐって洲之内が書いたエッセイだった。二人の戦争体験を同断に論じるのは軽々に過ぎるかもしれないが、それでも南京の虐殺にふれた会田のエッセイ「一つの体験として」は、容易には言葉にできない「戦争の体験」がこの人にあったことを告げている。展覧会準備中に齋藤が貸してくれたカセットテープで、会田の肉声の朗読を聞き、なみなみならぬ「重さ」を詩人が抱えていたことを衝撃とともに痛感できた。会田の詩における一種の飄逸さは、この強烈な重さと表裏のものとして読まれるべきなのだろう。

会田より6歳若い三好より、さらに23年下の齋藤にとっての死とは、何であったのが、現時点でよく分からない。しかし齋藤の作品を今回間近に見、近作の縛られた手という意表をつくイメージの連作に顔を近づけ、下絵に書き込まれた言葉の数々を読むうちに、「生命と死」という、抽象的といえれば抽象的な問題であり、命題であるものが、この画家にとってはつねに眼前に、具体的にたちはだかり、挑み続けてくる相手であったことを、驚きとともに実感できた。

死は、人の周囲にいつも起る。けれどそれらは常に他人の死であり、自らの死を、人は、決して目撃も体験もできない。だからそれは死ぬまで忘れられるものであると同時に、死ぬまで忘れられないものでもある。そのような矛盾の風の、嵐の、吹きすさぶ坩堝から、在処から、言葉や線を、イメージを、声を紡ぎ続けた人々がここにいる。

大倉 宏(砂丘館館長)

会田綱雄

あいだ つなお

1914年東京都生まれ。日本大学社会学科を卒業後、40年志願して中国に渡り南京特務機関嘱託となる。南京で詩人の草野心平を知る。47年「歷程」同人となる。57年詩集「鹹湖」で第一回高村光太郎賞を、77年詩集「遺言」で第29回読売文学賞を受賞。ほか詩集に「狂言」(1964)「汝」(1970)「会田綱雄詩集」(1972)「会田綱雄詩集」(1975)「星座」(1977)「遺言」(1977)がある。1990年没。

三好豊一郎

みよし とよいちろう

1920年東京都生まれ。早稲田大学専門部卒。鮎川信夫らと交遊し、戦時下に詩誌「故園」を発行。47年「荒地」創刊に参加。49年詩集「囚人」を刊行。75年「三好豊一郎詩集」で無限賞、84年「夏の淵」で高見順賞受賞。ほか詩集に「小さな証し」(1963)「三好豊一郎詩集」(1970)「老練な医師」(1974)「Spellbound 三好豊一郎詩集」(1975)「林中感懐」(1978)「寒蟬集」(1989)がある。詩作のかたわら写真画をよく描き、1992年の晩秋に古心堂画廊(東京)で絵画展を開き、直後に没した。

齋藤隆

さいとう たかし

1943年東京都生まれ。独学で絵を描き始め、63年より読売アンデパンダン展に出品。以後個展を主に発表を続け、ほか山種美術館賞展、从展、明日への具象展、横の会展等にも出品し、モノクロームによる異形の人間像を精力的に発表。また「日本画と現代・今を生き、そして描く」展(福島県立美術館 1988)、「日本画・現代の視角・その模索と実験」展(新潟市美術館 1990)、「異形のFigure-東北の3人展」(宮城県美術館 1993)、「日本画・純粋と越境」展(練馬区立美術館 1998)等に出品。2004年リアス・アーク美術館(宮城)、09年喜多市美術館、13年福島県立美術館で齋藤隆展が開催された。14年第7回円空大賞展で円空賞受賞。